

お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム
「ジェンダー研究のフロンティア」

第 3 回 F-GENS シンポジウム
《研究集約型》

家族の境界—表象・身体・労働の政治—

お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア—(女)〈家族〉〈地域〉〈国家〉のグローバルな再構築—」(F-GENS)は、2006 年 11 月 18 日(土)、19 日(日)の 2 日間において第 3 回 F-GENS シンポジウム「家族の境界—表象・身体・労働の政治—」を開催する。

2004 年第 1 回 F-GENS シンポジウムは「グローバル化、暴力、ジェンダー」と題し、現代のグローバル化のもとにおける、ジェンダー視点からの平等・公正・衡平に関する問題提起、とくにその最大の障害である暴力に焦点をあてるものであった。続く 2005 年第 2 回シンポジウムは、「ポスト冷戦期のアジアとジェンダー研究」をテーマとして、米・ソ冷戦体制の終焉後の世界状況が、近代の思考枠組みと参照項の喪失としてのポスト冷戦期を迎えているという認識のもとに、間アジア視点にたつジェンダーの問題追求を研究教育拠点形成における中間報告としておこなった。

2006 年第 3 回シンポジウムは、過去 2 回にわたって問題としてきた、アジアにおけるグローバル化、ポスト冷戦期のジェンダー再配置に関わる課題を、ミクロ・メゾ・マクロレベルにより踏み込むと同時に、方法的提起を含めて明らかにすることを意図し、「家族の境界—表象・身体・労働の政治—」をテーマとして設定している。とりわけ、アジア地域におけるグローバル化の最新局面は、90 年代末のアジア通貨危機以降には、経済のみにとどまらない、文化・社会全般の変容を明確にしている。現在進行している法制度の改編、労働市場や世帯構造の変化、科学技術と生殖の関係、そして、これら政治的かつ経済的な状況は、何より、言語・表象による意味それ自体の生産と意味システムの変容・再編として現われ、これらは常にジェンダー的課題を含んでいる。この生産／再生産過程が、いま、何を生起させつつあるのか、これらを議論する場としたい。

第一日目・第 1 セッションにおける特別報告は、ピョン・ファスン(韓国)による、現代の韓国における女性関連法案制定の経緯と現状、韓国社会におけるジェンダー平等の進展や新たに生じている問題点について報告がなされる。次に、マーサ・ファインマン(米国)による「家族をめぐる法と社会」に関しての特別寄稿が発表される。これを受けてパネル・ディスカッションでは、法・政治学、歴史学、経済学からの問題提起と領域横断的な討論をおこなう。

第二日目は、まず、若手研究者によって企画されたセッション「〈身体〉のポリティクス—複合領域としてのジェンダー／セクシュアリティ研究の試み」(分科会 A「連続する身体—脱／セクシュアル化の視点から—」、分科会 B「〈老女〉の位相を問う—エイジングのジェンダー化をめぐる多角的アプローチ—」)がおこなわれる。若手研究者支援は、本 COE プログラムにおける最重要責務のひとつであり、このセッションが果たしている成果発表の意義は大きい。

最後の第 2 セッションは、「再生産／テクノロジー」を主題とし、各プロジェクトから報告する。とくに本年度は研究集約型であり、各プロジェクトによる集約的成果の提示がおこなわれる。ポスト冷戦期のアジアにおけるグローバル化は、ジェンダー分析の視点から解析するならば、再生産領域のグローバル化として生起し現象化している。この現象は、労働、移動、家族・世帯構造、科学技術など広範におよぶが、これは言語・表象による意味生産の不断の遂行において現実を構成するコードとして起ち現われる。それは生の技法としての広義のテクノロジーの過程であり、ここにジェンダーがいかにかに織り込まれているのかが問われるのである。このセッションは、第一日目のセッションへの応答であるばかりでなく、シンポジウム全体をつらぬく問題提示をおこなうものであり、今後の本 COE プログラムの最終着地点に向けての要諦である。

2006 年 9 月 6 日

第 3 回 F-GENS シンポジウム担当事業推進担当者: 足立眞理子、天野知香

第 3 回 F-GENS シンポジウム実行委員会: 足立眞理子、天野知香、新井慶子、李秀眞、
戒能民江、倉田容子、澁谷知美、竹沢純子、
中野裕美子、中村真由美、野中颯子、御船美智子